

山口大学 平成10年度卒業式 学長告辞  
平成11年3月25日 学長 広中平祐

本日ここに、平成10年度卒業式を挙行するにあたりまして、この山口大学から巣立って行かれる卒業生2,106名の一人一人に、心からのお慶びを申し上げます。今日の佳き日は、卒業する皆さんだけでなく、学長である私自身を含めて、ご参列くださいました諸先生、ご親族、ご友人、総ての関係者各位にとって、最も嬉しい日です。

卒業生の貴君達の人生はこれから先が長いのですが、その長い人生のどこかの時点で、今日という日を振り返ってみて、それが貴君にとって大切な人生の節目だったと気付く時が必ず来ると、私は信じています。山口大学の卒業生であることを、今この時点で貴君が感じているよりも何十倍も強く有難いことだったと感じる時が来ることを私は確信しております。その時とは、実は、貴君が自分の人生の中で最も輝く時だろうと私は想像しています。これから貴君は、山口大学卒業生らしく、貴君独自の進む道をじっくりと探し求めて止まず、やがては、貴君らしい生き方のスタイルを見定めて、前向きに一步一步しっかりと精進して、真なるもの、善なるもの、美しいものを求めて生きていける事を、私は信じて疑いません。

私は、貴君の山口大学卒業資格を認定する山口大学長である事を、最高の誇りに思っています。さらに私は、貴君が山口大学の卒業生である事を一生の誇りとして持ち続けてくれることと確信しています。人類未踏の新しい21世紀を展望する若い諸君の中には、既にこの時点で自分の進む道はこれだと決めておられる方も多いでしょうが、中には今でも決めかねて暗中模索を続けている方もあるでしょう。いずれにしても、未知の将来に対して不安がないと断言できる人は稀でしょう。未知の世界に直面すれば一抹の不安を感じるのは自然であり、人間である事の証であるとも言えます。もしも将来のどこかの時点で、貴君が自分の職場で自身を失いそうになったことがあったら、その時は自分が山口大学の卒業生であることを思い出してください。私はきょう、山口大学の学長として、貴君等の一人一人が山口大学の立派な卒業生であることを公に宣言いたしました。学長である私の責任で、私が確信をもって貴君を世に送り出したのです。もしも、厳しい苦しいと思う時があったら、私とその責任の一端を担っているのだという事実を思い出してください。私は、貴君一人一人を心から信頼しています。貴君の長い人生の中で、仮に思いがけない失敗があったとしても、貴君は挫けないはずです。ことのほか厳しい局面に巡りあったとしても、貴君は耐え抜いて生き抜くはずです。貴君は、貴君らしい貴君なりの立派な人生を築いてくれるものと信じており、それを私の最大の楽しみとしています。しかし、もしも、貴君を取り巻く世間が厳し過ぎて、これ以上は耐えられ

ないと思う時があったら、そのような万一の時には、もう一度山口大学に帰って私達を訪ねてみてください。人間らしく強く生きていくための知恵の相談であれば、私が喜んでお相手しましょう。私は貴君の保証人の一人だという事を覚えておいてください。

私の考えでは、卒業式とは教師と学生が対等な友人関係の始まりを宣言する儀式だと思っています。教える教えられるという子弟の関係にも友人としての感情はあったかも知れませんが、卒業する貴君と大学に残る私達の友人関係は、これから対等の段階に入っていくのです。友人関係のもっとも大きなメリットは、必要なとき相談できるということです。何が出来て何が出来ないかを本音で相談できるというのが友人関係というものです。私は今日、学長として公に貴君の卒業資格を宣言する人間として、貴君が「私は山口大学の卒業生として誇りを持って生きてきた人間です」と言ってくれる限り、そして私がこの世に命を戴いているかぎり、私は貴君の友人であり続けたいと願っています。

貴君は、山口大学という学園を精神の土俵とした学生生活を実体験してこられたのです。今日振り返ってみられて、その感慨は各人各様であろうかと拝察いたします。学びに励み、体を張り、思いを尽くし、時に幸運と勝利の喜びに躍り上がったたり、時には、妬みや悩みや疑いに取りつかれて自分を見失ったり、あるいは悲しみに打ち沈む時間を経験した方もあるかも知れませんが、いずれにしても、今日までの山口大学での貴君の生身の体験は、貴君の心の深層から消え去ることはないでしょう。貴君は、山口大学で学んだことの多くのことを忘れ去ることでしょう。私自身も、大学で学習した多くのことを忘れ去って今日まで生きてきました。また、学生時代の幾つかの嫌な体験は忘れ去ればよいと思って、未だに忘れることの出来ない苦い経験もありました。忘れたこと、忘れられないこと、私自身も若いころには様々の経験を重ねました。それでも、貴君の今日の感慨の中には、貴君だけのもので私の推測など及びも付かぬこともあるでしょう。いずれにしても、私が断言してはばからないことは、貴君の生涯を通じて、貴君が山口大学の名称を忘れ去ることはないということです。貴君と私が共有して暮らした山口大学を忘れる事は出来ないはずで

さらに、貴君がこの山口大学を今日まで育ててくれた山口県を忘れ去ることもないと、私は信じています。14世紀中頃から二世紀にわたる大内文化の時代には、この山口県は日本と海外との貿易と文化交流において要の役割を果たし続けました。毛利権勢の下での文武育成の時代には、山口大学のルーツである明倫館や山口講堂を中枢として、山口県は教育県として全国にその名を馳せました。吉田松陰の村塾で教育された志士を中心とした多数の県人たちは、日本の国家形態そのものを革新した明治維新の発端から終結まで、日本近代史の巨大ドラマを演出しました。山口大学は教育県山口の伝統を継承する国立大学で

す。

私は山口大学のそのようなルーツにも誇りを感じています。しかし、過去は与えられたものでしかありません。若くて将来の可能性が大きい貴君たちを目の前にすると、私は自分がこの世に存在しなくなる未来までを想像して、山口大学の将来に対する夢が広がります。過去は知ることが出来ても変えることは出来ません。未来は知ることが出来ないが創造することは出来るのです。過去はありのままに受け止めるだけのもの、未来は勇気と努力で創造するものです。創造は、誰でも勇気と努力さえ惜しまず尽くせば可能となるものです。長い将来を夢見る特権を与えられた若い貴君は、創造の喜びこそ、貴君の人生において最も確実に貴君のものとなる喜びだということを知っていただきたい。この事実を知って生きるだけでも、貴君の人生は明るい方向に向いて行くでしょう。目標を設定して辛抱強く着実に努力を続けていけば、予想より大きく早く目的が達せられることを、私は自分自身の経験から知っています。かつて私自身が経験したように、貴君にも、こんな能力が自分にもあったのかと、自分で自分の力量の大きさに驚く日が来るのを楽しみに待っています。

山口大学に残る私たちは、大学のさらなる発展のための創造の作業を続けます。将来、卒業生の皆さんが日本中どこに行っても、また海外のどの国に行っても、自分の母校である山口大学を自慢して語れるような大学であるように、私たちは努力を続けます。

ご列席の学部長、附属図書館館長、附属病院長、医療技術短期大学部部長、学生部長、事務局長、さらに学外からご多忙の中わざわざご出席くださいました皆様には、この卒業式の喜びをいっそう記念すべきものにしてくださり、私からも厚く御礼申し上げます。

本日、学位記を持って卒業していかれる貴君それぞれの今後ますますのご健勝とご発展を祈念して、私の告辞といたします。

平成11年3月25日 山口大学長 広中平祐